



若き人々へ

若き人々へ
中井正一をめぐりて
新刊紹介
紹介したい本
わたしの大学生活、基点は図書館
お知らせ

若き人々へ

—「生と死」をめぐって：挫折・自由・愛—

図書館長 谷口文章

もし、事故によって身体が突然不自由になり、わずかに口が動くだけとなったなら、私たちはどのような人生をすごすことになるであろうか。そのような体験をした人が、絵筆を口にして書いた絵画集とその詩を紹介しよう。



《生と死》：「おだまき」
いのちが一番大切だと
思っていたころ
生きるのが苦しかった
いのちよりも大切なものが
あると知った日
生きているのが
嬉しかった

(星野富弘「鈴の鳴る道」、偕成社)

ルソーは、人間は二度生まれるという。一度目はこの世に存在するために、二度目は理性が目覚めのときに。さらに、人間は二度生まれるだけでなく、人間は二度死ぬとも考えられる。一度目は胎児から赤ん坊として肺呼吸するときに、二度目は身体が死を迎えるときに。このように考えると、生と死は別々のものではなく、同じものの表と裏なのであろう。

この世に生を授かるときの産声は、歓喜と苦しみの叫びなのだ。そして、もの心がつき、理性が目覚め、生の意味を考えると、ふと死の予感がする。それは思春期の苛立ち、青年期の未来への不安となって現われる。より真実の人生や本来の自己を求めるときには、深刻な生と死を経験するためである。

充実した人生を生き抜いてきた人は、「いのち」と「死」の対立をこえる「生」を体験してきたといえよう。その体験は、「生きている」ことの喜びである。

しかし、「いのちより大切なもの」とは、さらに一体何なのか。人はそれを、死の影を帯びる「挫折」をのりこえてこそ、実感するのもかもしれない。

《挫折》：「はなきりん」
動ける人が
動かないているのには
忍耐が必要だ
私のように動けないものが
動かないているのに

忍耐など必要だろうか
そう気づいた時
私の体をギリギリに縛りつけていた
忍耐という棘のはえた縄が
“フッ”と解けたような気がした

(同上『風の旅』, 立風書房)

キルケゴールによると、絶望とは「死に至る病」であるという。しかし、挫折や絶望のない人生などあるのだろうか。「いのちより大切なもの」を求めて外へと彷徨うとき、結局は挫折しか残らない。しかし、人生の目的は何であれ、自分にとって大切な「もの」を求める“過程”においてこそ、いのちより大切な「生の体験」をしているのだろうか。

「忍耐」という自我心が支配する限り、絶望がつきまとう。「忍耐している」と感じるのは、あとから辛かったと思うもので、そのときにはかえって充実した生の体験で満たされているはずだ。そして“あるがままの自己”に気づいたとき、執着する忍耐の棘から解放される。その過程では、心は挫折や絶望から“開放”されて「自由」なのだ。

《自由》：「たんぼぼ」

いつだったか
きみたちが空をとんで行くのを見たよ
風に吹かれて
ただ一つのものを持って
旅する姿が
うれしくてならなかったよ
人間だってどうしても必要なものは
ただ一つ
私も余分なものを捨てれば
空がとべるような気がしたよ



(同上)

カントは、人間の尊厳は道徳法則にしたがう自由意志を持っていることだという。自らのいのちと死を引き受け、「余分な」欲望を捨てれば、精神は自由である。「大切なもの」を、外ではなく内に自覚するとき、絶望は希望へと反転する。すでに大切な生をもっていたことに気づくからだ。それは、自由な心である。

私たちは、あまりにも余分なものを持ちすぎている。一つの可能性、一つの体験、それで十分だ。そのように気づけば、「愛」の体験に支えられて、心は「風に吹かれて」自由に大空を「ただ一つのものを持って旅する」であろう。

《愛》：「しょうぶ」

黒い土に根を張り
どぶ水を吸って
なぜきれいに咲けるのだろう
私は
大ぜいの人の愛の中にいて
なぜみにくいことばかり
考えるのだろう

(同上)

パスカルは、人がこの世にあるのは愛するためにはかならないという。生のなかの死、充実のなかの挫折、自由のなかの束縛、そのような呪縛から、人を開放し包むものは愛なのだ。愛は、死のなかの生、挫折のなかの充実、束縛のなかの自由を教えてくれる。愛とは、恋愛のような同一化する力だけでなく、さらに「ゆるし」であるといえまいか。どれほど広く深く愛しているかは、どれほど広く深くゆるすか、ということなのかもしれない。他人に対しても自分に対しても。

愛と憎をこえた「いのちより大切な愛」、それは人を拘束するものではなく、人生における無償の見護りの体験であろう。